

行雲舎の本棚から その3

こんにちは。図書室のあるゲストハウス・行雲舎です。約2000冊の蔵書の中から、気になる本やお勧めの本を紹介します。

今回は、児童書の棚からミヒャエル・エンデ作の「モモ」を選びました。宿泊客の方から「本棚に『モモ』があったので嬉しかった」という感想をいただいたので、久しぶりに読み返しました。今年は日本で「モモ」が発刊して50周年の節目にもあたります。

『モモ』ミヒャエル・エンデ著

「時間どろぼうとぬすまれた時間を取りかえてくれた女の子のふしぎな物語」。サブタイトルにこう書かれています。人々から時間を奪う「灰色の男たち」と、時間を取り戻そうとする少女モモの物語。忙しさや効率が優先される現代にも通じるファンタジー物語です。

ドイツの児童文学者ミヒャエル・エンデが1973年に執筆し、日本では1976年に発刊されました。ちなみに可愛らしい表紙や挿絵もエンデ自信の手によるものです。ITの急速な発展で便利になった一方で、ますます時間に追われ、生活のゆとりを失っている今だからこそ、本当に大切な時間とは何かを考えさせてくれる一冊でした。児童書ですが、大人にこそ手に取ってほしい名作です。

本書の内容（要約）

主人公のモモは年齢も分からない孤児で、廃墟の円形劇場に暮らしています。モモには人の話を心から聞く特別な力があり、悩みを抱えた人々はモモと話すことで元気や希望を取り戻していました。

ところがある日、「灰色の男たち」が街に現れ、人々に時間を節約するよう勧めます。人々は効率ばかりを追い求めるようになり、心のゆとりや人とのつながりを失っていきます。実は灰色の男たちは、人々が節約した時間を盗んでいたのです。

大切な友人たちまで変わってしまったことを悲しんだモモは、時間を司る存在の力を借りて灰色の男たちに立ち向かいます。そして、人々から奪われた時間を取り戻し、街に再び豊かで温かな暮らしをよみがえらせたのです。

印象に残った一節

時間をケチケチすることで、ほんとうはべつのなにかをケチケチしているということには、だれひとり気がついていないようでした。じぶんたちの生活が日ごとにまずしくなり、日ごとに画一的になり、日ごとに冷たくなっていることを、だれひとり認めようとしませんでした。（中略）けれど、時間はすなわち生活なのです。そして生活とは、人間の心の中にあるものなのです。人間が時間を節約すればするほど、生活はやせほそって、なくなってしまうのです。

読後の感想

宿泊者の方の言葉で、「モモ」を再読する機会となりました。前にいつ読んだのかは正確に思い出せませんが、年齢を重ねたいま、時間の大切さ、豊かさの本質についてより深く考えさせられました。

生成AIをはじめITの発展により、現代人は仕事や生活は便利になる一方、ますます時間に追われ、忙しくなっているような気がします。それだけに、エンデの「時間はすなわち生活なのです。そして生活とは人間の心の中にあるものなのです」というメッセージが心に刺さりました。

本との出会い、人との出会い、そして自分自身と向き合う時間。そうした一つひとつが、暮らしを豊かにしてくれるのだとあらためて感じました。

行雲舎もまた、本と人、そして豊かな時間に出会える場所であり続けたいと思います。

